

## 自閉スペクトラム症児における移動動詞「行く／来る」の指導法開発と教育実践への適用に関する研究

朝岡寛史（高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門 講師）

### 1. 研究の背景と目的

自閉スペクトラム症（ASD）児は、「行く／来る」や「売る／買う」等のことばの理解や表出に苦手さを示すとされる。その理由として、他者の視点を取得すること、つまり自分と他者から見たときでは状況が異なるという理解が困難であるためと考えられている。本研究では、視点取得の“困難”と捉えるのではなく、その特性を“活用”することにより、教育実践につながる「行く／来る」の指導法を開発することを目的とした（研究1）。そして、研究1から得られた知見を整理し、統制された条件を実践場面に導入し、その指導効果を検証することを最終的な目的とした（研究2）。

### 2. 方法

**研究1**では、ASD児3名が参加した。「6時間目が終わりました…」といったナレーションと「今日、僕の家遊びに来る？」といった質問文を合計40セット作成した。その際、「質問→応答」として、「行く？→行く」「行く？→来る」「来る？→来る」「来る？→行く」の4つの型の質問文を各10種類設定した。「小学生日記をさつえいしよう！」と題し、小学生の日常のある場面を切り取った演劇場面を想定した。撮影は、監督のカチンコの合図によって開始された。ナレーターが「6時間目が終わりました…」といったようにナレーションと読み上げ、その直後に児童役（対象児と一緒に演技する学生）が「〇〇ちゃん（対象児の名前）、今日、僕の家遊びに来る？」と尋ねた。アセスメントでは、二者の位置関係とジェスチャーの有無を組み合わせた条件を設定した。続く指導では、適切な身体運動や言語表出を生起させるための手がかりを徐々に撤去し、自然な状況へ近づけていった。このとき、質問文の型に応じて二者は対面または横に並んで着席した。例えば、「来る？→行く」では二者は対面した。最後に、指導で用いていない質問文を用いてテストを行った。言語表出、反応時間、視線パターン、身体運動を指標として、移動動詞の習得状況を評価した。さらに、指導場面で達成後に、保護者に指導で用いた台本をもとに説明し、日常生活の文脈において対象児に「行く／来る」を用いた質問をする機会を設定した。

**研究2**では、新たにASD児3名が参加した。こども発達センターなどでベースライン測定後に指導を行った。手続きの効果検証が可能な研究デザインを用いた。研究1の結果から、二者間の身体運動の同期（シンクロ）が移動動詞の理解や表出に影響を及ぼす可能性が示唆された。そこで、児童役をジェスチャーから上半身の前後方向の運動に変更した。具体的には、児童役はセリフ（行く／来る）に応じて自身の上半身を前後にわずかに（5cm程度）動かした。



図 対面時におけるジェスチャー（左：研究1）と上半身の運動（右：研究2）

### 3. 結果と考察

対象児の適切な身体運動の出現を促進すると予想された環境条件（二者間の空間的位置関係およびジェスチャー・上半身の運動）を導入し、徐々に日常生活の状況に近づけていくことで、移動動詞「行く／来る」の習得が促進された。研究1および研究2の結果から、ASD児が移動動詞を習得するためには、質問文の型に応じた位置関係に並び、相手がどの方向を向き（相手の顔への視線停留）、どの方向に動いているか（上半身の動きへの視線停留）に注目し、すなわちASDの視点取得の特性を“活用”し、自分自身の身体を相手の動きに同期（シンクロ）させることが有効であると考えられた。

### 4. 今後の展望

本研究の結果は、二者間の身体運動の同期が移動動詞習得のひとつの重要な要因となる可能性を示唆した。このことは、定型発達児において「行く／来る」表出時にジェスチャーが産出されるという先行研究の知見に対し、ASD児も微弱な反応が出現することが推測される。今後の研究では、定型発達児とASD児における移動動詞使用時の身体運動の発達的特徴を評価すべきである。さらに、言語の違いや主語項の省略の有無が習得に及ぼす影響を検証すべきである。